

地域活性のための経験学習プログラムのデザインと実践

- 豊橋市電沿線におけるフィールドワークを事例として -

加藤文俊（慶應義塾大学）

Keyword：地域活性、経験学習、フィールドワーク

【はじめに】

われわれは、2004年秋より、カメラ付きケータイをはじめとする、モバイル機器を活用した社会調査の実践を試みてきた。地域コミュニティの資源を評価・再評価することは、まちづくりやコミュニティ・マネジメントの問題のみならず、われわれが「生活者」として共有する社会的記憶やパブリック・ヒストリーの問題、さらには魅力のある“場（場所）”の要件を考える上で、きわめて重要である（ハイデン, 2002）。また、コミュニティにおける問題を多面的に理解し、コミュニティの成員間で共有するための仕組みづくりや学習環境のデザイン（体験学習のプログラム化等）にも貢献しようと考えられる。

本報告においては、筆者らが2008年11月に実施した、豊橋でのフィールドワークを事例に、地域活性のための経験学習プログラムのデザインについて論じる。

【問題意識】

筆者は、2004～2008年度にかけて実施したフィールドワークの成果をふまえ、地域活性をテーマとするワークショップのデザインに役立つ概念的な整理および仕組み作りをすすめている（加藤, 2009）。こうした仕組みは、単に地域活性のための学習プログラムだけではなく、人間形成や大学と地域との関わり方を考える上での視座を提供するはずである。

大学と地域との接点を考える際、とくに「よそ者」としての視点を際立たせることが重要だと思われる。アメリカ、オーストラリア等を中心に、実践の拡がりをもつ Asset-Based Community Development (ABCD) アプローチ (Kretzmann & McKnight, 1993) は、もっぱら「内側」からの働きかけの重要性を際立たせているが、実際には、「外側」からの刺激とともに相互構成的に、地域における「学び」が実現すると考えられる (Kato, 2008)。

われわれは、フィールドワークやインタビュー等の定性的な社会調査を中心的な活動に据えた、経験学習プログラムのデザインをすすめている。それは、「よそ者」としての大学生が、フィールド調査を通じて地域住民との関係性を築きながら、比較的短い滞在期間中に地域資源

の発見、再発見のきっかけとなるような成果物を作成するもので、これまで、柴又（東京都）、金沢（石川県）、坂出（香川県）、函館（北海道）、宇宿（鹿児島県）、佐原（千葉県）等で実践を試みた。成果は、小冊子、ポストカード、ビデオクリップ、音声コンテンツ（ポッドキャスト）など、比較的容易に共有・流通可能な形でまとめる。こうした成果物を地域に還すことによって、地域における活動が可視化され、事後のふり返りが可能となる。このアプローチでは、即効性のある提案を導くことは容易ではないが、地域に暮らす人びとの生活観、地域への愛着等の「分厚い記述 (thick description)」を試みることで、あらたな発見や気づきの誘発が期待される。

【事例：豊橋フィールドワーク】

われわれは、2008年11月29日（土）から30日（日）にかけて、豊橋市（愛知県）の市電沿線を中心とするエリアでフィールドワークを実施した（学部学生を中心に17名が参加）。2日間の大まかなスケジュールは、下図の通りである。

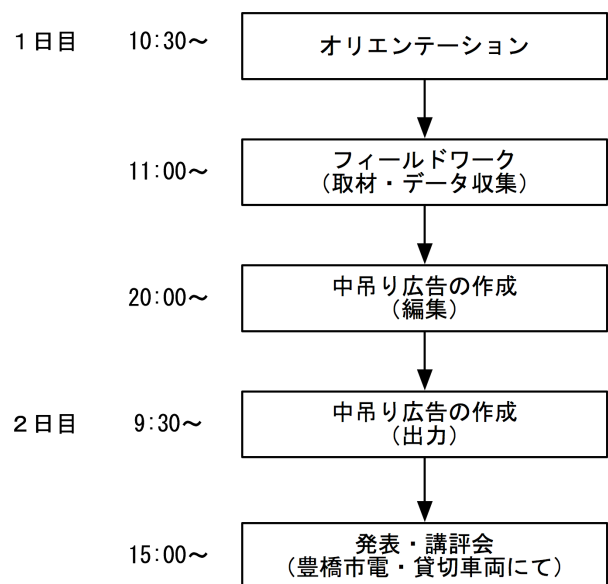


図1：豊橋フィールドワーク・スケジュール（2008年11月）

道路や鉄道は、地域や都市のイメージをつくるのに重要な役割を果たしている。ときには、「エッジ」となって、

そのイメージを分断することもあるが、場所に対する親しみやすさや愛情は、おそらく、われわれが考えている以上にバスや電車などの交通機関と関係している（リンチ, 2007）。なによりも、通勤や通学など、多くの人びとの毎日の「足」として、日常生活にとけ込んでいる。われわれが、毎日眺めている「あたりまえ」の風景は、こうした公共交通機関の路線と無縁ではないはずだ。また、市電沿線は、全長が比較的コンパクトなため（豊橋の場合は、全長およそ5km）、歩いてまちを把握するには、適切なスケールだといえる。

われわれは、フィールドワークの成果を地域に還すことを重視し、そのためのひとつのやり方として、電車の中吊り広告の形式で調査の成果をまとめ、公開する実践をすすめている。報告書やレポートは、成果をまとめる方法として一般的ではあるものの、実際にまちに暮らす人びとに成果を届けるのに、最適な媒体だとはかぎらない。市電や路面電車の沿線での調査結果は、その利用者への報告を最優先すると、電車の車両内に中吊り広告おして掲出するのが、一番適していると考えた。今回は、江ノ電（神奈川県）や函館市電（北海道）沿線での実践に続く、3度目の試みであった。

【経過】

過去の試みでは、フィールドワークののち、数か月ほどかけて、中吊り広告のデザインをすすめた。時間に余裕があると、フィールドワークをふり返りながら作成できるので、現場での体験が再構成され、ある程度熟成されたアイデアが形になる。しかしながら、自分たちの作成した中吊り広告を載せて走る電車を見るためには、もう一度出かけなければならなかった。近距離ならともかく、学生たちとともに、再度まちを訪れるのは、かならずしも簡単なことではない。そこで、「豊橋にいるあいだに仕上げる」というやり方でワークショップを設計することにした。

第1日目は、各自で市電沿線を歩き、フィールド調査を行った。「市電が見える・市電から見える」という緩やかなテーマを与えておき、具体的な調査対象やアプローチは、各自の判断に委ねた。学生たちは、フィールドワークを終えたら、すぐに、写真やフィールドノート等の整理を始め、中吊り広告の編集作業をすすめ、翌日の午後2時を期限に完成を目指した。この試みは、また出かける必要がない、という利便だけではなく、あたえられた時間のなかで、自らの活動を組み立てるといった課題に

向き合うことが重要な意味を持つ。素材を集める、アイデアを整理する、デザインするという一連の流れを、自分で設計することになるからである。ひとり一人の構想力と実行力を問われることになる。



図2：市電内でのプレゼンテーションと講評（2008年11月）

2日目は、朝から作業が再開され、中吊り広告が順番に印刷されていった。ひとり一人がPCを持っていても、プリンターは一台だけなので、予想していたとおり、印刷待ちの列がボトルネックになった。そして、よくある話だが、途中でコンピューターがフリーズしたり、用紙サイズの設定などでなかなか思うようにプリンターが動かなかったりしながらも、ほぼ予定していた時刻に、無事に全員の中吊り広告が出力された。その後、豊橋駅に移動し、市電車内で各自がプレゼンテーションを行った（図2）。豊橋観光コンベンション協会、豊橋鉄道株式会社のご厚意により、貸し切り電車を運行し、走る車両の中での講評会が実現した。同車両には、われわれにくわえ、豊橋観光コンベンション協会や新聞社、NPO 団体等から7、8名が同乗し、意見交換をすすめた。途中の停車時間をふくめ、90分ほどの講評会を経て、全体の行程は終了した。

【考察】

今回は、フィールドワークから成果物の作成、講評会にいたる一連のプロセスを、一泊二日で実施するよう全体を計画した。この試みをふり返りながら、経験学習プログラムのデザインについて、いくつかの論点を整理しておきたい。

（1）**あたらしい関係性の醸成** まず、今回の試みにかぎらず、こうしたフィールド調査を実現するためには、地域との連携は欠かすことができない。さまざまバリエーションは考えられるが、大学（研究室）と地域との関

わりについて、「委託調査」「共同研究」という形式で結ばれるケースは少なくない（図3・左）。たとえば、地域コミュニティは、大学（研究室）に対してある種の専門性や技術等に期待し、そのためのコストを研究費という形で補助する。大学（研究室）は、地域コミュニティを「クライアント」と見なし、大学（研究室）は、一連の調査研究を設計・実施することになる。当然のことながら、決められた期限内に報告書等を作成する義務を負う。近年の産学連携への関心の高まりからも、こうした形式による連携はきわめて重要であろう。

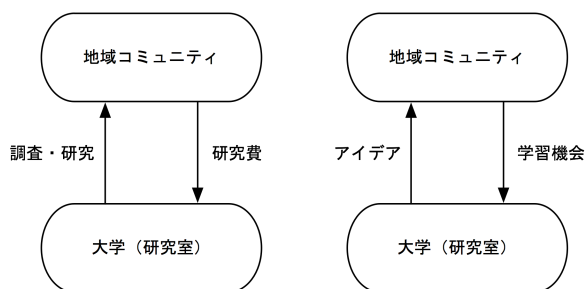


図3：大学と地域コミュニティとの関係性

いっぽう、代替的な考え方として、より互恵的な関係性にもとづく実践も可能である（図3・右）。地域コミュニティは大学（研究室）にとっての「クライアント」ではなく、双方が自律的・互恵的に結びつく。この場合においても、ある種の交換関係は成立するが、たとえば地域コミュニティは、まち自体を「教科書」や「教室」として利用する機会（あるいは学習の「場」）を大学に提供し、その代価として、滞在中に（あるいは滞在をきっかけとして）生まれた成果（アイデア）を地域に還すのである。すぐさま地域活性に結びつくアイデアが出ることは期待できないかもしれないが、中長期的な関係性を醸成する第一歩として、位置づけることができる。今回は、われわれと、豊橋観光コンベンション協会・豊橋鉄道株式会社との間で、金銭的なやりとりはほとんど発生せず、フィールド調査を実現することができた。

また、副次的なものとしてとらえられがちではあるが、短い滞在期間中に育まれた関係性によって、その地域の「ファン化」「サポーター化」の素地ができるはずだ。運用に関わる実費を、地域コミュニティから直接得るのではなく、研究助成等で外部から獲得することによって、大学（研究室）と地域コミュニティとの間にボランティアな紐帯を築くことが今後の課題となるだろう。

（2）**現地調達の重要性** 今回の試みでは、最終的な成果物を中吊り広告のサイズ（B3サイズ）で出力する必要があったため、大判プリンターを大学から持参することを前提に、全体のスケジュールが構成された。だが、ネットワークの軽さを重視し、かぎられた時間内での作業によってわれわれの「創造力」が喚起されると考えるならば、多少の欠乏感や居心地の悪さを、意図的に学習プログラムに埋め込んでおく必要がある。

できるかぎり「現場」での作業を増やすことが、ワークショップにおけるコミュニケーションの活性化やチームづくりに寄与するとともに、参加者と地域住民との関係性の醸成に役立つ。直接体験を重視する経験学習という側面からも、支度や調達といった課題に取り組むという体験は、貴重な「学び」の機会となる。ときには、支度や調達の成否が、フィールドワークや成果のまために直結するため、緊張感を保ちながら、現場での人々との関わりについて考えることになるはずだ。

現実的には、こうしたフィールド調査を実現するためには、事前の準備や調整が必要であるが、できるかぎり現地調達や、現場での即時即興的な判断によって課題に向き合うことができるようなプログラム設計が望ましい。その意味でも、われわれは、移動や一時的な参集（解散を前提とした参集）のもつ意味について、概念整理をすすめる必要があるだろう。

（3）**道具づくりと組織づくり** 豊橋のフィールドワークでは、「その場でつくって、その場で還す」という側面を際立たせることができた。まちを歩くことから始まり、編集から印刷まで、ひとり一人が責任をもってすすめたという意味では、個人作業が中心だったと理解することができる。しかしながら、たとえば、20人ほどの参加者に対して一台しかないプリンターをめぐることは、他の参加者との調整も必要になる。何よりも、期限までに、全員が印刷を終えていなければ、講評会を定時に開始することができない。そうした状況においては、個人で作業をすすめながらも、全体の進捗に目を配る能力も問われることになる。つまり、フィールドワーク全体のことを考えると、他の参加者との微細な調整作業を要求される、グループワークという側面も重要であった。

言うまでもなく、グループワークは、たんなる「分業」ではない。能力の高い、自律的な個人が集まり、有機的に結びついたときにこそ、グループとしての価値も高まるのである。個人作業に没頭すると、他人のことや全体の流れに気持ちが回らなくなる。逆に、まわりを意識し

すぎると、自分のやるべきことがおぼつかない。自分の「見え」と他人の「見え」、さらには全体の「見え」を、相互に関連づけながら、課題に取り組むことが重要だ。

また、道具や組織に必要以上に頼ってしまうと、自分たちのあたらしい可能性に触れることなく、フィールドワークが終わってしまう。フィールドワークにおけるデザイン課題やコミュニケーションのあり方を多重的に設計しておくことで、道具づくりと組織づくりのプロセスが相互に影響をあたえ合いながら、創造的な「場所」が生まれる。

【おわりに】

やや荒削りではあるものの、この5年ほど、全国を巡るワークショップ型の体験学習プログラムの実践をつうじて、大学と地域とのあたらしい関係性のあり方について考えてきた。そのなかで、とくに重要だと思われるのは、大学（研究室）の「居場所」に関わる問題である。近年、まちづくりには「よそ者・若者・バカ者」の目線が役立つ、と耳にすることが多い。われわれは、「よそ者」が、いったいどのような場面で、どのようにまちや地域に貢献しうるのかを、きちんと整理して考えなくてはならない。

それは、地域に暮らす人びとのみならず、「専門家」をもふくめて、まちや地域に関わる人びととの関係性をあらためて考え、理解することである。それぞれの立場で器用に棲み分けや役割分担をするということではなく、もしかすると、「地域住民」と「専門家」という図式そのものを見直すことが求められているのかもしれない。

【引用・参考文献】

- ・ ハイデン, D. (2002) 『場所の力：パブリックヒストリーとしての都市景観』 後藤春彦・篠田裕見・佐藤俊郎（訳）（学芸出版社）
- ・ Kato, F. (2008) From "campus" to "camp": Toward a design of learning opportunities for building communities. ABCD Asia Pacific Conference, Newcastle, Australia.
- ・ 加藤文俊 (2009, 近刊) 『キャンプ論：フィールドワークの創造力（仮）』 慶應義塾大学出版会
- ・ 加藤文俊 (2008) 地域メディアのデザインをつうじた「学び」の実践：「中吊りギャラリー」の試み PC Conference2008 (CIEC) 論文集, pp. 192-195.
- ・ Kretzmann, J. and McKnight, J. (1993) Building

communities from the inside out: A path toward finding and mobilizing a community's assets.

Skokie: ACTA Publications.

- ・ リンチ, K. (2007) 『都市のイメージ 新装版』 丹下健三・富田玲子（訳）（岩波書店）
- ・ 豊橋フィールドワーク (2008) : 加藤文俊研究室 <http://vanotica.net/toyop1/>
- ・ 東愛知新聞 2008/12/1 歩いて探した豊橋の魅力 市電の「中吊り広告」で発表
- ・ 東愛知新聞 2008/11/23 街歩きで「豊橋の魅力探し」 市電沿線をフィールド調査 中吊り広告で発表